

事例紹介

5

特殊教育諸学校 / ろう学校

埼玉県立坂戸ろう学校

(埼玉県坂戸市鎌倉14-1)

2004年2月現在、埼玉県立坂戸ろう学校に勤務している障害者は、聴覚障害者3人(2級3人)



あらゆる意味でのバリアフリー社会をめざして

東武東上線北坂戸駅から徒歩15分、静かな住宅地の中に、松や桜の古木が残る埼玉県立坂戸ろう学校があります。設立は1956年4月。幼稚部から高等部まで現在110人の生徒(うち寄宿舎生28人)が学び、そのほか0歳からの乳幼児教育相談に15人ほどが通っており、86人の教職員でカバーしています。

中・高等部では、陸上部、野球部、卓球部、バレーボール部、文化部の部活動に全員参加するとともに、地域の保育園、小学校、中学校、高等学校、養護学校、さらには地域社会との交流・連携を深めて、教室での自立をめざした教育だけでなく、あらゆる意味でのバリアフリー社会の実現を進めています。

また、同校では、研究テーマ「よりよいコミュニケーション環境を求めて」を設定し、基礎学力の向上を図るとともに、自分で考え表現できる力をつけるためのコミュニケーション環境を、どう整え、どう指導していけばよいのかについての研究を進めています。

現在、坂戸ろう学校には、3人の聴覚障害のある教職員が配属されています。

「あらゆるパーソナリティーがいきいきと豊かに活用される真のバリアフリー社会になるためには、教育・福祉・医療・労働などが一体となった支援づくりが必要であり、本校がそのセンター的な役割を果たすことが求められていると思います。そのために、聴覚に障害のある教職員の存在は、幼児・児童・生徒たちにとってのみならず、本校教職員の質的向上、さらに聴覚障害者が無理なく溶け込めるバリアフリー社会づくりに寄与できるものだと思っています」と語るのは松下幸夫校長。同校の職場環境についても「配属された聴覚障害の教職員が、日常の業務に支障がでないよう、現有の人的物的条件の範囲内での支援体制を整えています。具体例では、職員会議などで教職員のだれかが必ず手話通訳をするようにしています」と同校長。

同校の卒業生で、今年で36年在職になる小池修さん



PROFILE

小池 修(こいけ おさむ)さん
1949年生まれ 54歳。
障害は聴覚障害(2級)。

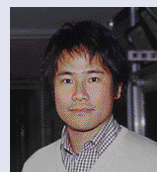
3歳のころ、病気が原因で失聴。聴力は左右とも100デシベル。1968年、埼玉県立坂戸ろう学校に実習助手として配属。



PROFILE

布施谷 修(ふせや おさむ)さん
1951年生まれ 52歳。
障害は聴覚障害(2級)。

25歳のとき、不慮の事故で失聴。聴力は左右とも110デシベル。1994年、埼玉県立坂戸ろう学校に体育担当教諭として赴任。



PROFILE

戸田 康之(とだ やすゆき)さん
1977年生まれ 26歳。
障害は聴覚障害(2級)。

1歳のとき、中耳炎が原因で失聴。聴力は左右とも110デシベル。2003年、埼玉県立坂戸ろう学校に社会科教諭として赴任。

障害者というパーソナリティーが 社会や組織を再活性化すると 信じています。



黒板書きのほか、カードやOHPも使い、さらには身振り手振りを交えての戸田先生の熱のこもった授業。

は、実習助手として産業工芸科などで生徒の自立をめざした教育の支援をしています。県立高校の体育教師だった25歳のとき、不慮の事故で失聴した布施谷修さんは、同県立大宮ろう学校に勤務した後、同校に赴任し今年で10年、ろう重複生徒（聴覚障害と知的障害などをあわせもった生徒）の担任をしています。大学院を修了した戸田康之さんは、中学社会科の担任として赴任したばかりです。

職場環境で重要なのは、職場でのコミュニケーション

「先生になったキッカケは、中学時代に素晴らしい教師に出会ったからです。厳しくしかられても、自分が悪かったと思えるようなしかり方をする先生でした。当時は、東京オリンピックがきっかけになって、サッカー熱が盛り上がった時期でした。その先生はサッカーがうまくて、その姿にもあこがれました」と語るのは布施谷修先生。

その中学時代からの夢であった高校の体育教師になったばかりでの不慮の事故。心の葛藤は大変なものがあったろうと想像できます。それだけに、その挫折を乗り越え、聴覚障害者として社会参加をめざしている布施谷先生には、障害者が自然に溶け込めるノーマライゼーションの社会づくりには熱い思いがあるようです。

「本校の職場環境はノーマライゼーションが実現されていると思います。障害者が障害者であることを意識したりしない職場です。こうした職場環境があってこ



そ動く意欲が持ち続けられるんです。聴覚障害者の職場環境では、当然のことながら職場のコミュニケーションが重要なポイントになります。聴覚障害者というパーソナリティーは、雇用した企業にいろいろな面でプラスになるはずで、その能力を引き出すためにも、職場でのコミュニケーションは欠かせないものだと思います。布施谷先生自身の体験を交えた話には、健聴者中心の社会に対する強い願いが込められています。

「自分が聴覚障害者ということからも、バリアフリー化、住みよい地域社会づくりのための福祉運動に関心を持ち続け、どんな形でもよいからそうした運動に参加し、そして支援していくつもりです。また、教員の資質を高めるには、各種の研修に参加することも大切ですが、教育現場でもまだまだ手話通訳が十分保障されているとはいえない状況です。企業でも同じことがいえると思います。10年先、20年先を見ずえたバリアフリー化をめざしてほしいものです」と熱く語る布施谷先生でした。



Just the point

他の教職員の質的向上や生徒たちの生き方のモデルとして貴重な存在となっています。

埼玉県立坂戸ろう学校 校長
松下 幸夫（まつした ゆきお）さん

本校についていえば、まだまだ聴覚に障害のある教職員の採用が少ないと思います。聴覚障害の教職員は、教職員の手話の習得や、生徒にとっての生き方のモデルとして、貴重な存在となっています。聴覚障害の教職員が本校にいることにより、幼児・児童・生徒たちにとっての教育的効果は計り知れません。本校の3人の教職員についていえば、ろう学校の教職員としての資質、能力ともに申し分なく、人間性にもすぐれたものがあります。本校では、開かれた学校をめざし、地域の学校や地域社会との継続的な交流を図っていますが、そうした活動を進める上でも、健聴の教職員とともに両輪となって活躍しています。